

『ただ、君を愛してる』

2006年／日本／新城毅彦監督作品

右脳で感じる 映像と音楽と人物の息遣い

会員 中西 法貴 (63期)

『ただ、君を愛してる』
＜スタンダード・エディション＞
価格：3,990円（税込）
発売・販売：エイベックス・マーケ
ティング・コミュニケーション
©2006『ただ、君を愛してる』
製作委員会



今回、映画に関するエッセイの執筆ということで、どのような映画にしようか迷った。結果的に、私はあまり高尚な映画には興味がないということに気が付いた。そこで、数年前に見た恋愛ファンタジーものを紹介させていただくことに決めた。

この映画は、私がまだ司法試験の受験をしていた頃に当時の彼女に連れられて見に行ったものである。正直、あまり興味はなかった。単に付き合いのつもりで映画館に足を運んだ。しかし、観終った後、この映画の余韻にどっぷり浸っている自分がいた。これは余談であるが、私は、その後1人でもう一回映画館に足を運んでしまったほどである。

この映画のストーリーは、簡単にいうと次のようなものである。

カメラを趣味にする大学生の誠人（玉木宏）には大きなコンプレックスがあった。誠人は子供のころから腹部に病気を抱えていてずっと塗り薬を使っていた。その塗り薬の匂いは無臭にもかかわらず、誠人は異臭を放っていると勘違いしていた。それが原因で誠人は他人と接することが出来なかった。

ある日、誠人は静流（宮崎あおい）という女の子と出会う。静流は、誰かに恋をしてしまうと命を落とすという奇病を患っていた。おそらく、成長ホルモンの分泌が身体に悪影響を及ぼすのであろう。そのため、静流は身体の成長を抑える薬を飲んでおり、大学生でありながら、子供のような風貌をしており、誠人と同様、他人と接することなく大学生活を送っていた。

誠人に出会い、恋をした静流。しかし、誠人は静流ではなく、同級生のみゆき（黒木メイサ）に片思いして

いた。誠人に女性として見てほしいと思うようになり、静流は成長を抑えるための薬の服用を止めた。大人の女性の容姿を手に入れる代わりに命を落としてしまうことがわかっていたにもかかわらず。

ストーリーは、現実味のないファンタジーである。一見感情移入が出来にくそうにも見える。しかし、この映画には、現実味などそもそも必要ないのだろう。静かで美しい風景描写は、不思議な世界観を作り上げているし、何よりも、静流役の宮崎あおいのハマリ具合が素晴らしい。彼女が静流を演じることで、この映画の世界観が完成していると思う。幼い姿も大人の姿も、全てを非常に魅力的に演じており、映画を観終わった後、誰もが、自らの心の中から静流の面影をしばし消せなくなるに違いない。

この映画は、仕事に追われ、常に左脳を働かせている方々に、ぜひ観ていただきたい映画である。何も考えず、ただただこの映画が持つ静かな世界観に身をゆだねてみてほしい。映像と音楽と人物の息遣いを、右脳で感じてほしい。そうすれば、きっと、エンディングでは温かい涙を流せることだろう。現実味のないファンタジーであるがゆえに、現実世界に疲れている人々の心に癒しをもたらしてくれるはずだ。

もしかしたら、LIBRAの内容にはそぐわない映画を紹介してしまったのかもしれない。しかし、このエッセイを読み、この映画に多少なりとも興味を持ち、DVDのレンタルでもしてみようと思ってくれた方がいれば、その方はきっと、「観て良かった。」という感想を抱いてくれるはずだ。